

幸福度に関する研究会  
第1回議事録

幸福度に関する研究会（第1回）

議事次第

日 時：平成 22 年 12 月 22 日（水）16:30～18:03

場 所：第 4 合同庁舎 1212 会議室

1. 開 会

2. 議 事

（1）事務局からの説明

（2）意見交換

3. 閉 会

○山内官房審議官 では、時間になりましたので、始めたいと思います。

本日は年末の大変お忙しいところお集まりくださりまして、誠にありがとうございました。ただいまから第1回「幸福度に関する研究会」を開会いたします。私は座長が決まるまでの間、進行を務めさせていただきます、審議官の山内でございます。よろしく願いいたします。

なお、本日は大竹委員と駒村委員が所用により御欠席となっております。

山田委員におかれましては、所用で若干遅れて参加されるという見込みになってございます。

それでは、まず開催に当たりまして、この研究会の主催者であります、私どもの和田政務官からごあいさつを申し上げます。

○和田内閣府大臣政務官 皆様どうも初めまして。政務官をやっております和田隆志と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今回このようにたくさんの皆様方にお集まりいただけることに、本当に自分としても非常に喜びを感じております。まさに自分は今、幸福だということでございますが、人にとって幸福というのはいろんな側面から言えるし、物の考え方によっては幸福ではないという方向にも働きますし、多様なテーマだと思います。

しかし、私たちは政権交代を果たした後に鳩山総理が誕生したわけですが、鳩山総理がおっしゃったことも、とにかく大きな意味での幸福を得られる社会にしていきたいということでありましたし、いろんな経緯がございましたけれども、今の菅総理に切り替わったときにも、多分我々の経済運営も問題があるかと思いますが、今度は現下の経済情勢の中で非常に苦しんでいらっしゃる方々がたくさんいらっしゃるだけに、政治の使命として苦しんでいらっしゃる方々を、どれだけきっちりサポートできるかということ、使命感を持って今度は不幸な方々を国の中で最小にしようということをお願いいたしました。

実は最初に少しだけ時間をいただきまして、経緯を申し上げておいた方が皆様方に意欲を持っていただけるのではないかと思います。もともとこの2年弱ぐらいの期間、政権を担ってきたトップのお二人が、私どもは単に与党や政府の中におるわけですが、こういうことが大事だから検討しろと指示が下っていたのが、実はこの幸福度でございます。両総理が自分の演説にも使っているぐらいなので、本来それをテーマに掲げて政権をあげて勉強をして、そんな中でどういうふうになったら幸福なんだから、これを求めて国は運営されるべきといったところまでたどり着ければという思いはあったんだと思います。

詳しくは御説明する時間がございませんが、しかし、いろんな諸情勢の中でそれを十分検討する時間がなくて今に至っていて、今回、内閣の改造の中でそういったことをしっかりと内閣府の中で勉強してこいという御下問をいただいているということ、最初に実は皆様方に打ち明けた上で、是非力をお貸しいただきたいと思う次第でございます。

先ほど申し上げたように、いろんな分野からお集まりいただきまして本当にありがとうございます。また、私たちの役所の中も、宮崎先生を始めとして本当に多方面からお集まりいただいていることは、まさに幸福度というテーマが象徴している現象だろうと思っています。つまり、富の源泉としてのお金が得られれば幸福かということ、そうではないということでしょうし、かと言って精神的なものだけで幸福になれるものでもない。そういったことを総合的に何か言えることはないだろうか、探していく勉強会にしていきたいと思っています。

今、司会の方からもありましたとおり、そういうふうなことを検討していくグループにしていきたいんですが、やはりリーダーシップをとっていただく方を一人、皆様方の中でお願いしようと考えておりまして、いろいろ委員をお願いした経緯の中から私なりに考えさせていただきまして、今日いらっしゃっていただいています山内委員に座長をお願いできればと思っている次第でございますが、皆様方それによろしゅうございますでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○和田内閣府大臣政務官 それでは、山内先生、座長席にお出ましいただきまして、これから後のイニシアチブをとっていただければと思いますが、これから先タイムスパンとして6月ぐらい、要するに今回は年を結ぶ前に1回はと思ったものですから、ぎりぎりではございましたが開かせていただきまして、来年6月までに何らかのものを得たいと思っている次第でございます。どうぞお力をいただきますよう、よろしく願いいたします。どうもありがとうございます。

○山内官房審議官 政務官、どうもありがとうございます。

では、山内先生に座長席にお移りいただいて、プレスの方は退席をいただけますでしょうか。

(山内委員、座長席へ移動)

○山内座長 改めまして、大阪大学の山内と申します。よろしく願いいたします。

先ほど和田政務官は、御自身は幸せだと言われましたけれども、私は日ごろそういうことも考えたこともなくて、こういう役が務まるかどうかわかりませんが、御指名ですのでよろしく願いいたします。

それでは、司会進行を務めさせていただきますが、時間がタイトで6時までにはいろいろな検討事項を処理しなければいけませんので、御説明をいただく方にはあらかじめ持ち時間が伝えられていると思うんですけども、それよりも更に1～2割ぐらい短めというおつもりでお話をいただければと思います。

まず、資料1の研究会の開催要領についてお手元に資料があると思いますので、御確認をいただければと思います。資料2が運営要領となっております。この運営要領に従って進めさせていただきたいと思います。

配付資料、議事録については原則として内閣府ホームページにおいて公開することとさ

させていただきます。座長が特に必要と認めたときには公表しないものとする事ができるということですが、原則は公開ということで御承知おきいただければと思います。

それでは、研究会の進め方について、事務局の高橋主任研究官から御説明をお願いいたします。

○高橋主任研究官 経済社会総合研究所で幸福度を担当しております高橋と申します。私の方から説明をさせていただきます。

今回の研究会なんですけれども来年6月まで4回ほど開催したいと思っております。詳しくは資料3になります。今回は初回ということでバックグラウンドをお話した上で、意見交換ということで進めさせていただければと思いますが、今後、指標化を考えていきたいと思っております、指標化するに当たっての枠組みを2月に第2回として開催できればと思っております。

第3回を4月の早い段階で、指標も1つということではなくて指標群として考えていくことを考えてはどうかと思っております。先ほど政務官からもお話がありましたように、いろいろな価値観が入っていますので、そこをどう整理して入れていくかということで検討いただければと思っております。

第4回として6月ぐらいまでにパブリック・コメントをかけた上で提言をとりまとめて頂く。以上のような手順で行えればと思っておりますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

以上です。

○山内座長 ありがとうございます。それでは、少し説明をまとめてからまた御質問等があれば、お受けすることにしたいと思います。

次に政府の取組みについて、事務局の山内審議官からよろしく願います。

○山内官房審議官 右肩に資料4と書いてある資料をごらんいただきたいと思っております。私の方からは幸福度の問題について、政府においてどういう取組みをすることになっているか。その位置づけについてお話をさせていただきたいと思っております。

ここには6月18日に閣議決定をいたしました、新成長戦略の中から関連部分を書いてございます。ごらんいただきますと国家戦略プロジェクトの中で「新しい公共」という部分がございますが、この中で下の方、線が引いてある部分辺りですが、「新しい公共」の構築に向けた取組みを着実に実施、推進する。また、新しい成長及び幸福度について調査研究を推進するとなっております。

第4章の中においても、今、出てまいりました新しい成長という概念の中で、下線部をちょっと読ませていただきますと「日本政府としては、幸福度に直結する、経済・環境・社会が相互に高め合う、世界の範となる次世代の社会システムを構築し、それを深め、検証し、発信すべく、各国政府および国際機関と連携して、新しい成長および幸福度（well-being）について調査研究を推進し、関連指標の統計の整備と充実を図る」としてございます。

ページをおめくりいただきますと工程表が載っておりまして、その工程表の一番下の部分、青線で囲んだ部分が幸福度の関係でございます。一番左側を見ていただきますと、2010年度に実施する事項、早く着手する事項ということがございまして、その中で有識者からなる研究会を立ち上げ、幸福度について調査研究を推進とございます。まさにこの研究会で調査研究をしていただくというのが、この部分でございます。

更に2011年度以降でございますが、関連指標の関係等を検証しながら指標の統計の整備あるいは充実を図ることが、その後のスケジュールとして出てまいりまして、我々の目標といたしましては一番右ですが、2020年ごろを目途として、これは幸福度ではなくて主観的な意味での幸福感という言葉ですが、後ほどこれはまた資料の中で御説明をいたしますけれども、幸福感を調査いたしましたところ平均で6.5点だったということがございます。これを引き上げていこうという目標を立てているところでございます。こうした取組みを今後政府としてやっていくということで、御承知おきいただければと思います。

私からの説明は以上です。

○山内座長 ありがとうございます。

それでは、次に平成21年度国民生活選好度調査について、事務局の田和参事官から御説明をお願いいたします。

○田和総括担当参事官 総括の参事官をしております田和でございます。よろしくお願いいたします。

今、山内からも説明がございましたが、今回の成長戦略の中には2020年までに達成すべき成果目標というものを掲げたわけですが、これを策定した当時には余り指標となるものがございませんでしたので、とりあえず今年4月にやった国民生活選好度調査というものを材料にして、とりあえずの指標を置いておりますけれども、まさにこの点は今後この研究会でいろいろ議論いただいて、よりいい指標をつくって、その指標を1つのメルクマールにして考えていくのかななどと思っている次第でございますが、まず今、我々がやりました選好度調査で幾つかおもしろいファクトが出ておりますので、それをちょっと紹介したいと思います。

資料5は既に公開しております。資料6の方でかいつまんでおもしろい点だけ御紹介させていただきたいと思います。まだこれは公表しておりませんので、今回が初めてなんです。ポイントとしては所得別と年齢別を調べてみたところでございます。

資料6の1ページ目をごらんください。これは日本と欧州4か国を比較したのですが、幸福度が高いというデンマーク、薄いブルーで示されているものは7点以上が多い。日本はオレンジでございますが、ある意味でフタコブラクダのような図をしております。どの程度幸福かということで10点満点で申告をしてもらっているデータでございます。幸福度が国際的に低かったハンガリーとかウクライナ、ハンガリーが紫、ウクライナが緑ですけれども、これはフタコブもしくはヒトコブラクダのような分布を示してございます。

2 ページ目は日本の所得階層別に見たものでございます。実はこれを所得階層別に見ますと 100 万円未満とか、100 万円以上 300 万円未満は、ある意味でハンガリー型、ウクライナ型と似たような形、ヒトコブかフタコブラクダのような形になっております。300～500 万円が黄色ですけれども、ある意味で今の日本のトータルのような姿をしている。1,000 万円以上の所得階層は、実は先ほどのデンマークのような姿をしていることが 1 つ非常にポイントとしてあると思います。

3 ページ目は日本の幸福度を判断する際に重視した事項でございますが、健康、家族、家計ということで、非常に日本の特徴として結構家族関係を挙げている方が多くいらっしゃるということでございます。

8 ページ目は男女別でございます。7 点以上のところを見ると、やはり女性の方が幸福度が高いという結果が出ております。

9 ページ目は年齢別でございますけれども、7 点以上という比較的幸福度の高いところをターゲットとして見ておりますが、30～39 歳のところが 61% のシェアで 7 点以上、70 歳以上が 44 ということで、日本の場合は 33～39 歳を 1 つの山として、年齢を重ねるにつれて幸福度がある程度低まっていくという傾向がみられるということでございます。

10 ページ、幸福度を判断する際に重視したことは何かということでございます。若い世代では友人とか自由な時間を要素として挙げていらっしゃいます。中年は 30～49 歳ということで家族とか家計とか、そういうものを挙げている。

11 ページはこれから幸福度を高めるために何が有効かということなんですが、これは年齢が若い層ほど自分の努力を挙げていらっしゃる方が多い。年齢が高まるほど家族との助け合い、社会との助け合いといったものが非常に高くなるという傾向がございます。特に 15～29 歳は友人とか仲間との助け合いが突出して高い傾向が出てございます。

ただし、水準で見ますと社会の助け合いは非常に低いんですけれども、15 ページを見ていただくと、ボランティアをやっている方とそうではない方の 7 点以上の幸福度を見たものですが、ボランティアをやっている方の方が相対的に幸福度が高いという結果が出てございます。選好度調査では出していなかったのですが、この機会を使いまして公表させていただきます。

以上です。

○山内座長 ありがとうございます。

それでは、更に説明が続いて恐縮ですが、資料 7～資料 9 について高橋主任研究官から説明をいただきます。

○高橋主任研究官 資料 7、資料 8 で海外の話をしていただきます。その後、日本の経験ということで資料 9 を続けて御説明させていただきます。

この研究会のスケジュールのところで少し OECD のお話をさせていただきましたが、その背景もしゃべらずにお話をしたので、どういうことかわからなかったと思います。その点をかいつまんで整理したのが資料 7 になります。

実はOECDは社会進歩及び幸福度の計測というテーマで検討をここ数年行ってきております。特に2007年6月にトルコ・イスタンブールで行われましたOECD世界フォーラムで、社会進歩あるいは幸福度をどういうものととらえるのか、それをどう測るのか、それをどう使っていくのかについて、今後各国政府あるいは国際機関が連携して考えていくべきではないかというイスタンブール宣言をOECDだけではなくて国連、EUというもろもろの機関で共同してとりまとめております。それが1つのモーメンタムとなって、21世紀の社会進歩あるいは幸福度を考えていきたいと思いますということでスタートしております。

その流れの中でメルクマールの1つとなったのが、フランスのサルコジ大統領が設置したスティグリッツ委員会で、設置自体は2008年でしたが、2009年9月にその報告書を出す中で、GDPの限界と客観的な指標だけでなく、主観的幸福度、持続可能性の指標の重要性を提言しました。その提言の中には今後いろいろな指標を整理して、社会状況の実態を明らかにしていく必要があるということでまとめております。内容については同じ資料7のペーパーの中の4～5ページ目に付いておりますので、お時間があるときに見ていただければと思います。

その後、このスティグリッツ委員会の提言が各国の統計部局だけではなくて、政府あるいは政府のトップに影響を与えていくということで、G20、G8あるいは今年のOECD閣僚理事会に影響を与えていったということです。OECDは特に2011年、2012年に社会進歩、幸福度について最優先課題として取り組むとしておりまして、その成果をもって2012年にインドで世界フォーラムを行っていく予定で、それに向けて作業をしているという流れになっております。

その流れの中で、資料8になりますけれども、社会進歩及び幸福度に関していろんなところで、指標化に向けたいろいろな動きが起きているというのを整理してみました。アジアではブータンが一番有名で、国民総幸福量という取組みをやっておりますし、韓国でも1975年に名前自体は社会指標という、昔の社会指標ムーブメントの中で始まったものではありますが、それを87年、94年、2004年と幸福度指標に近い形で改良しています。また、タイについても第10次開発計画という政府レベルの開発計画の中で位置づけられて、グリーン・幸福度指標をとりまとめております。アジア以外では、フランスとともに今、欧州で大きい動きは欧州委員会でbeyond GDPという取組みを2007年からやっておりますけれども、一番の提言としてGDPを補完する指標群を考えるべきということで、指標化の作業に入っているということです。

資料8の参考というものを後ろに付けておりますが、韓国は指標がそもそも487ということで多いものですから、従来型の指標の人口とかGDPも入った形になっておりますけれども、例えば分野として重視すべきということで家庭家族も入ってきています。

次のページがタイになりますけれども、タイの考え方は個人の上に家族がいて、地域。そして最後に国のレベルと階層的に考えていて、したがって個人の健康が最初に来るんで



すが、家庭とか地域、英語で **warm and lovely family** と書いてありますが、温かい家庭を築くことを中心にしていますし、地域の力で調和と相互援助と書いておりますので、特に個人を取り巻く環境を重視したような指標化をしてきております。

ブータンは次のページになりますけれども、これは御承知の方も多いとは思いますが、主観的幸福度自体の指標とともに身近な環境の保護が入っているのが1つ大きい点とされているのですけれども、文化とか生活水準、同じくコミュニティという視点が入っておりまして、大規模な世論調査を行うことによって計測をしています。

7ページに欧州委員会が先般公表した指標化案がございまして、大きくは個人を取り巻く環境として所得、住居、健康というベーシックな部分とともに、安全安心ということと、そして個人の自由もかなり重視しています。それにソーシャル・キャピタルという観点が入ってくるという整理をされておりまして、アジア的なものとの違いが出ているのではないかと思います。

欧州委員会の提案で気づくのはNAというものが結構ありますけれども、まだ指標としてはとらえられてないんですけれども、21世紀の幸福度を考える場合にはこういう指標群が必要なのではないかと提案も含んでいます。欧州全体でそれをとらえられる指標を開発していきましょうという提案も入っているという点は、注目していい点ではないかと思えます。

資料9は、委員の方の何名かは以前、指標化の中で関わっていただきましたので御承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、経済企画庁、内閣府の時代にいろんな指標化の取組みをしてございました。資料9をご覧頂くと4つの指標化の取組みを整理してまとめたものを表にしてあります。考え方としてはGDPではとらえ切れないものがあるという、今の議論と根幹のところではつながるところがありますけれども、指標化の整理の仕方として1つは活動分野でまとめているというのが多く見られまして、例えば食べるとか住むとか、そういうまとめ方をしていることが今まで多かったと言えます。その活動分野を価値観とか構造変化、国際化というマトリックスで整理をするということをしていました。

もう一つの論点としては、主観的幸福度、満足度みたいなものを入れてきたかという点があるのですが、最初の社会指標と国民生活指標については主観的指標を重視する形で入ってきていますけれども、その後のPLI、LRIという部分では、LRIは1つの指標としては入っておりますが、項目として重視されていませんし、PLIについてはウェイトづけにおいて重要度、例えば衣食住の重要度をどれだけ国民が考えているかというものでウェイトづけに使うという使い方とございました。このように主観的幸福度の扱いについてはそれぞれの指標化の中でもかなり違ってきております。

以上をまとめるとOECDの議論、あるいは各国どちらかというと西洋の方が影響力が今のところ大きいので、その価値観、幸福度をどういう価値観で整理するかということに指標化の仕方はおのずとなくなってしまいますので、そのところで日本としてどういう点を

挙げていくかを議論する必要があるのかなということが第一点として挙げられます。

また、今までの日本の議論、特に社会指標の報告書のときに言われていましたが、理論的背景が余り統一されていない中で指標化をしてきたとされています。

一方で今回のメンバーの方の中にも幸福度の研究をされている方もいますので、社会学にしる心理学にしる経済学にしる、かなり学術的な成果を得てきていると思います。それをどう生かして整理していくかを考える必要がありますし、「日本の価値観」といって、これが日本の価値観だから指標化の考え方に入れてくれと国際的に議論を持っていったとしても、議論にはなかなか乗っていかないと思います。ある程度、理論的背景を持って、こういうことで日本の価値観というのは構成されているんだというバックグラウンドとして使えれば、国際理論としても成り立っていくのかなと思いますので、その点を是非議論していただければと思います。最後の論点のもう一つは、幸福度といった場合に、これは後ほど白石客員主任研究官から御説明があるかもしれませんが、あなたは幸せですかという聞き方とあなたは人生に満足していますかという二つの指標化の方向が実は併存していて、ヨーロッパの今の幸福度の指標化というのは、どちらかというとも人生満足度を指標にしようという流れになっております。それでいいのかということも今後、議論をしていただければと思っています。

駆け足になりましたが、私からは以上です。

○山内座長 ありがとうございます。

それでは、事務局の御説明の最後ですが、幸福度に関する研究動向ということで、経済学の分野の研究動向を中心に、白石主任研究官から御説明をいただきます。

資料 10 です。よろしくお願いします。

○白石主任研究官 それでは、御説明をさせていただきます。私の方からは経済学における幸福度研究ということでございます。経済学では、特に 90 年代以降、幸福度に関する研究、いわゆる幸福の経済学というものが盛んに行われるようになりました。そのきっかけになりましたのが、スライド 2 枚目の図になります。ちょっと見にくくて大変恐縮なんですけど、この図は 1960 年代から 1990 年にかけて、日本の 1 人当たり GDP と幸福度の 1 つの種類であります生活満足度、先ほど高橋主任研究官の方からもお話がありました、生活にどれくらい満足しているかというデータをグラフにしているものでございます。

一見してわかりますとおり、1 人当たり GDP の方は右肩上がりに増えていっておりますけれども、生活満足度の方は横ばい、ほとんど変化がございません。直感で考えますと、所得が増えれば生活に対する満足度も上昇するだろうということなんですけれども、このように日本の長期的なデータで見ますと、両者にはほとんど関係がない。このように経済が成長しても幸福度は上がらないというのは、実は日本に限ったことではありませんで、このような状況を幸福のパラドックスと呼びまして、それはなぜなのかという要因を解明していこうということで、経済学では研究が盛んになってまいりました。

スライド 3、この右側の図はクロスセクションデータ、一時点のデータで見た所得と幸

福度の関係でございます。スライド3の方は、あなたは幸せですかという主観的幸福度を世帯の年収別に見たものでございます。これで見ますと、所得が高いほど幸福度は高くなっております。左側の図の方は、時系列で見た所得と生活満足度ということで、こちらの方は、一方は上がって一方は下がっているということで、時系列データで見た場合とクロスセクションデータで見た場合には、所得と幸福度は異なるということでもあります。

しかしながら、一時点のデータで見た場合も、所得が高くなればなるほど幸福度がどんどん上がっていくかということ、そうではありませんで、ある一定水準を超えますと頭打ちの傾向がございます。やはり幸福はお金では買えないのだろうかという疑問が出てまいります。

幸福の経済学では、スライド4のように幸福度の決定要因というのを、実際のデータを用いた計算によって探ろうとしております。一種の要因分析でありまして、これを私たちは **Happiness Equation** と呼んでおります。その場合の幸福度のデータは、アンケート調査で個人に直接幸福の程度を尋ねまして、その回答を幸福度のデータとしております。

そして幸福度に影響を与えていると思われるさまざまな要因を、**Happiness Equation** で言いますと式の上に立ててまいります。これまでの研究では、所得は少なくともクロスセクションデータの場合はプラスである。すなわち所得が高いと幸福度も高いということでございます。失業は幸福度を下げる。結婚はプラスである。年齢につきましては、OECD諸国の研究では、いわゆるU字型ということが言われておりまして、若いうちは幸福度が高いんですけども、中年といいますか40年代に向かってだんだん下がってまいりまして、高齢になると再び上昇するということがOECD諸国で言われていることなんです。日本では阪大調査で、高齢者ほど不幸だという結果になっております。経済格差は、人々の幸福度を低めるといふ研究もございます。

次のページですけれども、こうした要因分析によりまして、幸福度の決定要因というものが程度わかってくるということになりますと、逆に要因に政策的な変数を入れることで政策の効果を見ようという研究とか試みがなされております。

筒井先生たちの論文は、地域別に見た幸福度の格差というものの、その要因は何かということ进行分析しております。

その下の国土交通省の調査は、生活環境に関わる満足度を直接尋ねたものであります。

豊田論文というのは、横須賀市につきまして、例えば駅前の整備状況が住民の満足度に影響を与えているかどうかということ計量分析しております。

最近国ばかりではなくて地方自治体でも、この幸福度というものに着目するところが増えてまいりました。荒川区は、グロス荒川ハピネス、GAHと呼ばれる指標を、今、研究会を立ち上げて、私も委員の一人なんですけれども、そういうことで幸福度というのを区の政策目標に掲げるといふことをしてらっしゃいます。それが有名なんですけれども、ほかに熊本県でありますとか福井県、ほかに京都府、静岡県などでもそうした取組みが始まっているところでございます。

それでは、幸福の経済学の課題は何かということですが、1つはデータの問題です。先ほども個人に対するアンケート調査の回答を、もうそのまま幸福度と考えまして、それを分析していくとお話したんですけれども、よく批判がありまして、そうした個人の主観的な感情というものが果たしてどの程度データとして信頼できるのか、朝は幸福度が高いんですけれども、だんだん夕方になるとくたびれてきて低くなるということがよく言われているんですけれども、データとしての信頼性はどうかという安定性の問題、今これは研究者が一生懸命研究を進めているところですが、そうした問題もあります。

では、主観的ではない客観的なデータで幸福度指標をつくれればいいのか。その場合には、それは可能なのかという問題があります。

スライド7、先ほど高橋主任研究官の方からもお話がありました、日本ではNNWもありましたしPLIなど、客観的な指標で幸福度のような指標をつくろうというものがありました。国連ではHDIというものでつくっております。

その次のGPIを使いまして、少し客観的な指標で幸福度のような指標をつくろうということを御説明したいのですが、これは日本では滋賀県の方で盛んに取り組まれております。アメリカではカリフォルニア州で実際にGPIをつくっているそうなんです、スライド8が具体的な図ですが、基本的な考え方としましては、このGPIというものは、従来のGDPに対する一種のアンチテーゼのようなものでありまして、GDPは社会にとって、例えば公害のようなマイナスのものもプラスということでカウントしてしまう。一方で、基本的には金銭換算ができないような家事労働とか子育ての価値というものはGDPの中には入っていないので、GPIではこれらの要素を調整しようという考え方がございます。

このGPIなどのような一種の指標に対する批判としてよくあるものとしましては、それがどの程度正しいのかというのを、それこそ客観的に検証するのは不可能ではないかということがございます。

スライド9「モデルは正しか」ということで、もう一点、幸福の経済学の課題の2番目で御紹介しております。経済学というものは、長い研究の歴史を経まして、ある程度しっかりした人間行動のモデルというものが理論構築されてきたということですが、幸福の経済学の方はまだ研究の歴史も浅くて、行動モデルは探索中であるということが実情です。ですので、例えばさきに御紹介したHappiness Equationで、ある変数が幸福度に影響を与えているという研究結果が得られたとしても、実はそれは因果関係ではなくて、ある変数を高めれば幸福度が上がるかという関係が因果関係ではなくて、単なる相関関係である可能性もあるということでもあります。

また、現在さまざまな一種のHappiness Equationが研究されているんですけれども、その変数として何を入れるのかというのは、実は研究者の関心に依拠しているのではないかという批判もございます。

スライド10、経済学の観点から労働をどうとらえるべきかということ、それは興味

深いんですが、本日は時間の関係で割愛させていただきます。

スライド 11、幸福度に直目する動きが地方自治体にも出てきたというお話をいたしましたけれども、幸福度と政策ということを考えていく上で5点ほど課題があると考えております。

1つ目は、私どもの研究でもわかったことなのですけれども、所得要因はやはり幸福度を、少なくともクロスセクションデータで研究した成果によりますと、所得は幸福度を与える影響が大きいということです。所得以外、就業とか家族の要因も勿論幸福度と関係が深いんですけれども、所得はやはり幸福度に重要な点であるということを改めて確認する必要があります。

2点目は、幸福度を与える要因のうち、家族などの政策が直接関わらない、関わるべきでない点をどう考えるかという点であります。

3点目は、先ほども御説明したデータとしての適切性の問題です。

4点目ですけれども、これは実は私は個人的には重要かと思っている点なんですけれども、さきに御説明しました幸福のパラドックス、時系列で見ると所得が上がっていても幸福度は上がらないことをどう考えるかということなんですけれども、今のところ主に2つの説明が考えられております。

1つは、人々は周りの人の所得を参照しているからということです。日本の高度成長期のように、全体的に所得が上がっている状況では、自分でなくて周りの人の所得も上がっているということで、自分の所得は去年よりも上がったかもしれないけれども、周りの人と比べればそんなに上がっていないのではないかということです。

2つ目は、これは一種の慣れが生じるのではないか。所得が上昇した直後は、その影響でうれしいということで幸福度が上がるかもしれないけれども、人間は所得の上昇にも慣れが生じて、所得の上昇の影響がやがて消えてしまうということです。ですので、もし幸福度を高めるための政策として、所得を高めようという施策を行ったとしても、その効果は消えてしまう。したがって、幸福度はまた元の水準に戻ってしまう可能性があることをどう考えるかということです。

簡単ですが、御説明は以上でございます。ありがとうございました。

○山内座長 ありがとうございました。

それでは、意見交換に入りたいと思います。委員の皆様に順次御発言いただきたいと思いますが、今日は第1回目ということで、資料3のスケジュールにもありますように、後半、第3回、第4回辺りで幸福度指標の在り方についての提言をまとめなければいけない。どういう指標あるいは指標群がいいかということ、最終的には提言の形にしなければいけないので、幸福度というのは非常に間口が広い概念ですので、どういうところに重点を置いて検討していったらいいとか、そういうことについてコメントをいただければと思います。

何人かの委員の方から事前に資料を御用意いただいておりますので、その委員の方からま

ず御発言をいただきたいと思います。

最初に、内田委員からお願いします。後のフリーディスカッションの時間を長く取りたいので、できるだけコンパクトにお話いただければと思います。

○内田委員 京都大学の内田と申します。よろしくお願いいたします。私は社会心理学という分野の中で比較文化研究について関心を持っておりまして、特にその中で日本的な幸福感というのが一体どのように測定されるべきか、どういうふうに解釈するべきかということについて、幾つか比較文化の知見からのことを少しまとめさせていただきましたので、資料の方で説明させていただきたいと思います。

まず最初に、例えば経済指標と主観的幸福感ということと言いますと、先ほどのお話にもありましたように、確かにはっきりとした相関があるかないかというのは非常に難しいところだということが言われております。この1枚目のグラフというのは、国家レベルでの分布を調べたものです。つまりG N Pが高い国と、そうでない国を比較した場合に、やはりこれも個人レベルと同じく1つの天井効果が見られるということがわかっておりまして、ある程度豊かになれば経済的な効果はそれほどではなくなってしまいます。つまりインパクトが大きいということなのです。

それから、左端の方、つまり経済的には困難なところが多い国では非常に分散が大きくて、単なる右上がりの図にはなっていないということが、よく指摘されているところです。ここの中には、例えばG N Pが低くても幸福感が高い国が幾つかあるということになりますが、特にどういうところかと言いますと、例えばラテン系の文化の国などです。これらの国々では、日々のポジティブな気持ちをいかに持つかということが重要になっている。それが一種の価値観になっているということです。

この矢印で示しているところは、この95年時点のデータでの日本の位置づけです。日本は、このときにはG N Pはほかの国に比べると高いわけですが、同じG N Pの程度の国と比較すると日本の幸福感自体は低いという結果になっています。

例えばそのうちの1つが自由選択であると言われております。日本はソーシャル・コンプライアンス、プレッシャーが強くて、自由選択というものが少ないのではないかということを行っている研究者もいます。

もう一つ私たちが考えているのは、幸福感というものが文化的な価値観によって異なっているのではないかということです。先ほど人生や生活の満足について、よく使われている指標という話がありましたが、3つ目のスライドに人生の満足感尺度を出しております。大体この5つの指標で検討されているものなのですが、例えば私は自分の人生に満足している。これは非常に一般的なものですが、3つ目、4つ目、5つ目辺りは、獲得志向であるということがおわかりいただけるかと思います。例えば最後の項目「これまで私は望んだものは手に入れてきた」というのは、かなり個人的な獲得に基づいた考え方、価値観であるということが言えるかと思います。

この指標に基づきますと、アメリカの大学生の平均点というのが、大体7点尺度で言う

と5点以上、いろいろなデータがあるんですけども、ほとんどがこういった指標に対してポジティブに回答する学生が多い。ところが、アメリカと比べると日本は非常に低くて、7点尺度は4が中点になるわけですが、中点よりも大体低いという傾向があります。

これは勿論主観的な指標ですので、恐らく様々な心理的な要因が関わってくると思います。

例えば1つは極を避けるということ。日本人がスケールを使うときに、7点とか1点とかはなかなか使わない。どうしても中点を寄りがちであるということによって出てくる問題があります。

2つ目が、先ほども申しましたように、尺度の獲得志向が本当に日本的な幸福感なのか、果たしてそうなのかという、幸福感の定義に関すること。

3つ目が、覚醒水準。アメリカやラテン系の国というのは、うきうきする、どきどきする、興奮するという、非常に覚醒水準の高い幸せが幸せの意味として持たれているのですが、日本ではどちらかというと穏やかさとか、安心感とか、お風呂に入ってほっとするか、こういったことが幸福の指標になりがちです。

日本的な幸福ということを考えてみると、よいことと悪いことが人生には含まれているんだという価値観、概念、人生観があると思われまます。

あとは、関係志向性です。自分だけが突出していると、やはり周りが不幸になるのではないかという考え方もあります。

更には、人並み志向です。つまり何でも獲得すればいいのかと言えば、そうではなくて、むしろ周囲の人と比較して、自分は人並みかどうかということの方が重要ではないかということなのです。

それから、心理学的な話ですが、記憶バイアスということも研究されています。例えばその時々で、私は今、幸せを感じていますかと聞くのと、2週間くらい経ってから、この2週間を振り返って、どれだけ幸せでしたかと聞くのでは異なっているということです。アメリカでは、その時々で感じたうれしさというものが、後の記憶に残りやすいのですが、日本でこれを研究してみると、その時々での幸せさというのは、どちらかというと忘れられがちになってしまうということです。

このように考えると、どのように指標化するかというのは非常に難しい問題もありますし、下手をすると、単に日本が不幸だという解釈になってしまいがちなので、解釈には非常に注意を要するかと思います。

2枚目に移りたいと思いますが、例えば先ほどの人生観ということをやりますと、東洋での幸福感ということに関しては、どういう人生が幸せですかということをやった研究があるわけですが、例えばアメリカでは線形的な変化であるとか、ずっと幸せというのが幸せな人生であると考えられがちですが、中国や日本では、いいことも悪いことも両方あって幸せな人生である。つまりいいことというのが、例えば今、幸せ過ぎると、もしかすると次の日に悪いことが起こるかもしれないというふうに、逆にかえって不安になるとい

うことが言われています。

また、私どもが行った幸福感の意味内容を分析した研究があるんですが、これを見ていただければわかりますように、アメリカで幸福感の意味はと聞きますと、もう 98%近くが、いい意味ばかり出てくるわけです。1人5つずつくらい書いていただくわけですが、幸せになるとどんどんこれからも成長するというふうに未来予測もいいわけです。ところが、日本で見てみますと、幸福の意味の6割以上はポジティブな意味が出てくるんですが、残りの3割くらいは余りいい意味ではない幸せ感というのが出てきます。

先ほども申しましたように、例えば幸せ過ぎるとほかの人から嫉妬を買ってしまうのではないか。自分だけ突出して幸せだというのは、本当にいいことなのかということもありますし、幸せというのはすぐ逃げてしまうものであるとか、今、幸せ過ぎると次の日によくないことが起こるのではないかという無常観のようなものが出てきていることがわかりました。

こういったことを考えますと、1つの提案として、個人の獲得志向の幸福感だけではなくて、もう少し協調的な幸福感であるとか、実際の人並み感、また、いわゆるグローバルに成長するというモデルでだけではなくて、いかに小さな日常に幸せを感じることができるかということも大切ではないかということで、この協調的幸福感という概念を現在提案しております。

例えば私を無条件で受け入れてくれる人がいるという関係志向性であるとか、自分だけではなくて身近な周りの人も幸せかどうかという指標、大切な人を幸せにできているかどうか、家族関係というのが重要だったという話がありましたけれども、こういったことは恐らく自分だけではなくて自分の家族も幸せかどうかということを経験化していく必要があるのではないかと考えています。また、ささいな日常に幸せを感じるか、身近な人たち並みの幸せを手に入れていると思うかということが重視されるべきではないかと思えます。

最後に、幸福感を人生全体で尋ねるか、日々の感情経験で尋ねるかは、大きな違いがあります。先ほどの記憶バイアスの話でも申し上げましたけれども、人生全体となると獲得志向になってきますので、経済的な指標が効いてくるということが言われていますが、日々の感情経験というのは、どちらかというところこういった経済指標よりは、むしろどれくらい自分が助けてほしい人に助けてくれる人がいるかどうかという、サポートが重視されているということも、実際の実証研究からわかってきているので、もし主観的な指標を入れていくのであればということだと思えますが、この両側面を考えていく必要もあると思えます。

以上で終わりたいと思います。

○山内座長 どうもありがとうございました。何か話を聞けば聞くほど奥が深くて、本当にまとまるのか不安になってきました。

それでは、次に牧野委員に資料を御用意していただいておりますので、よろしくお願いたします。



○牧野委員 静岡産業大学経営学部の牧野です。どうぞよろしくお願いたします。資料は資料 12 に付けていただきました。私は、GDP 統計として知られる国民経済計算、その国民経済計算を使って、所得の流れや資金の流れ、それら経済循環をとらえるということを行ってまいりました。そしてその経済循環と、例えば家事や介護、育児という家計における無償労働をつなげる。また、環境負荷等をつなげる。また、非営利団体の活動をつなげる。そのようなことを研究テーマにしてまいりました。

そして、今回こちらの研究会に参加させていただくに当たり、私自身は幸福度については非常に不勉強であるんですが、その幸福度に関する指標群ができれば、先ほど白石先生のお話の中にごさいましたように、経済循環の中に、また経済モデルの中にそれらを位置づけることを意識できればいいなと考えております。

そのことが、例えば指標間の関連性を考察する。例えばこの指標とこの指標は代替的である、片方が上がれば片方が下がってしまう可能性がある。また、補完的である。この2つの指標は同じように動く。そのような指標間の関連性を検討する上で、また、産業構造の変化や消費構造の変化など、構造の変化と幸福度の関係を検討する上で、また、政策とのつながりを検討する上で必要なことなのではないかと考えている次第です。

資料で準備させていただいたのは、国民経済計算の構造を私なりにフローチャートで表わしたものであります。国民経済計算は、よくGDPが注目されます。GDPというのは、単独でそれ1つが国民経済計算の中に位置づけられているわけではなく、この循環の中の一部を取り出したものであります。具体的には、こちらの循環の網をかけた付加価値の部分を集計したものがGDPになっております。

そして、国民経済計算は大きく4つのブロックからできております。簡単に申し上げます。左上の期首ストックの部分で、例えば1月1日に各部門、家計などが持っている資産、負債、そして正味資産などです。1月1日に、これだけの資産を持っている。そして、負債を持っている。正味資産を持っている。これが期首ストックであります。

その後1年間の経済活動が始まります。それがその中のフローの部分であります。フローの部分では、左側に輸入がございます。輸入財が海外から供給され、真ん中辺りに国内財があります。国内財を国内で生産いたします。それらが総供給になります。それに対して右側に、国内財と輸入財に対する総需要があります。これが1年間のバランスになっております。

国内財を生産するためには、原材料等が必要です。それらを中間投入と言います。それらは直ちに中間需要として国内財・輸入財を需要することになります。また、生産活動によって所得が生まれます。それがそこに付加価値として出ております。これを各産業で集計したものがGDPになります。

このGDPは、項目別に分かれていきます。賃金など雇用者報酬、利潤など営業余剰、また間接税など生産・輸入品に課される税、補助金、そして減価償却である固定資本減耗です。

それらが家計、政府、企業などに分配されていきます。例えば雇用者報酬（賃金）は家計の中に分配されていきます。家計はそれらを受け取ります。ただ、全額それを自分で使えるわけではなく、例えば利子・配当を支払ったり、直接税を支払ったり、社会保障費を払い、また年金等を受け取る等々があります。その結果、可処分所得を得ます。そして可処分所得のうちの一部が最終消費支出として財・サービスを買うのに向かいます。それが右側に出ていきまして、最終消費支出として国内財・輸入財の需要をつくり出すという形になっております。

そして残りの部分が貯蓄になります。その貯蓄は、その表の真ん中より若干下に貯蓄、および資本移転と書いてあります。そして負債の変動と書いてあります。負債の変動は、銀行からお金を借り入れる。株式を発行してお金を集める。国債を発行してお金を集めるなどです。それら二重の四角でくくられた部分が、ちょうど投資のための資金になります。

そして、その資金を使い投資を行っていきます。それがその下の総固定資本形成、固定資本減耗と書いてあるところであります。そこで投資をすることに決めた資金は、総固定資本形成のところであります。右側に出ていきまして、財が欲しいということで、国内財・輸入財の総需要になっていきます。

また、そちらの総固定資本形成などが書いてある縦長の四角の下の方に、資産の変動とあります。ここで、例えば株式を購入することに決めたお金、また預金をすることに決めたお金は右側に出ていきまして、金融機関を通じ、また金融市場を通じ、ぐるっと回り他部門の資金調達に使われるという形でお金が回っていきます。

また、ここに記録されない、例えば株価・地価の上昇等を調整勘定に記録いたします。そして、期首のストック残高、ちょうど二重の四角でくくられています。この二重の四角でくくられている部分は、蓄積されていくことを示します。期首のストックに期中のフローの貯蓄などが加わり、そしてキャピタルゲインなど調整勘定が加わり、期末のストックになります。そしてこの期末のストックが、次の年の期首ストックとして次の年の循環につながっていく。そして次の年の循環の中にGDPが位置づけられるという形になっています。

勿論、幸福度の構成要素がこの経済循環の中にすべて位置づけられるわけではありませんが、少しこんなことを意識してこの研究会に参加できればと考えている次第です。

よろしく願いいたします。以上です。

○山内座長 どうもありがとうございました。

それでは、もうお一方、山田委員に資料を御用意いただいておりますが、コメントをいたたけますでしょうか。

○山田委員 遅れてきて申し訳ございませんでした。中央大学の山田昌弘と申します。家族社会学を専攻しております。

皆さん、白石研究官を始めとしてきちっとした資料を用意しているのに、私は、最近東

洋経済に書いたもの、『中央公論』での幸福論の書評を参考資料として付けさせていただきました。

社会学というものは、割と幸福の指標づくりなどでは今まで貢献をしてきたみたいで、先日亡くなられた、私も昔習った小室直樹先生も関わったと聞いておりますし、先輩である三重野先生なども幸福の指標に関わったと聞いております。

社会学というものは、いわゆる個人だけでなく関係性を重視するという立場であります。その人がどういう関係性を持っているかというのは幸福と関連してくるというような立場を取るわけです。

これからは半分、時間を拝借して、余談としても聞いていただけたらと思うんですけども、私、今日の午前中までは非常に幸福でして、なぜかといいますと、昨日、出版社のパーティーがありまして、そこで私はステージで勝間和代さんと2人で踊ったんです。それで、知らない人も含めて100人ぐらい、いろんな人が見ていながら拍手をして、ありがとうと言っただけで帰ってきて、その余韻がしばらく残っていますので、今日の朝、幸福度の質問をされれば私は10点に付けたと思うんですけども、研究会に出なければとかを思い出すと、だんだんと幸福度が低下してきまして、今、緊張しているので、幸福度は3ぐらいに付けてしまうのかなという気もいたします。

なぜ、こういう話をしたかといいますと、いわゆる他人からの承認というものが幸福に関わっているということはいろんな哲学者等も言っているところです。つまり収入が高いと幸福かという関係も、いわゆる他人からいいというふうに思われるという承認という主観的な要素があるというふうに考えております。それが1つです。

あと、3枚目の幸福論というところで少し説明させていただきますと、「最小不幸社会」というものは、意味はわかるんですけども、確かに不幸かないということは1つ大きなことであろう。ですから、いわゆるGDPがある一定の水準になるまで幸福度とは相関しますけれども、ある一定の水準を超すと相関しなくなるというのは、まず貧困とか病気になって治療できないとか、明らかな不幸というものを避けることができるかどうかという点までは多分、経済指標と連動しますし、更に今のいろんな国である貧困問題というものも、そういう不幸を避けることができない人たちが存在していることによる幸福度の低下というものは1つあると思います。

多分、そこまでがいわゆる消極的な不幸と私が言うもので、そして、その次の段階として、ここに書きたいいわゆる社会的承認を基礎とする積極的な幸福というものがあろうというふうな立場を私は取っております。

その場合に、別に昨日、私が踊ったから幸福であるというわけではなくて、踊るというステージに上がる前までにさまざまな社会的関係を、私や勝間さんだけではないですけども、構築していて、その社会的な承認の下にステージに立って拍手をされるというプロセス自体が多分、私に幸福感をもたらしたんだと私は自己解釈しております。家族がいれば幸福というものも、結婚したということは少なくとも自分にOKを出してくれた人が

1人いるということですから、正確に言えばいたということですから、結婚して3年経つと幸福度が落ちるといふのも、承認されたという過去は3年しかもたないということかもしれません。それがまず、いわゆる社会的承認と、それがどういうふうな形で持続するかというものが関係性によって保障されているかというのが、まず、私の一つの幸福に対する関心の第1点でございます。

もう一点は、刹那的幸福をどう考えるかということがあるんだと思います。ここに「若者ホームレス白書」というものも配布されておりますが、私もいわゆる若年非正規雇用者に対するインタビュー調査というものを10年ぐらい前から続けていて、最近では内閣府家族形成調査、いわゆる婚活調査と言われるもので、地方や東京などに行ってインタビュー調査をしています。東洋経済のコラムにも先日の経験を多少書いたんですが、刹那的に快感を得るといふような形で幸福感を得ている人たちがいることをどう考えるかというのが1つ大きな問題になってくると思います。

本当に地方に行きますと、真面目な皆様がいる前では失礼なんですけれども、アルバイトのお金を握りしめて風俗産業へ行くのが幸福である。それを循環させるのが幸福であるという人に会ったこともありますし、男性でしたらパチンコで1週間に一遍、わあっと大当たりが出る瞬間が幸福で、多分、それがしばらく持続して、持続しなくなるとまた行って、当たりが出るまでやって、幸福という形の幸福システムを内面化している人もいるわけです。ですから、そういうことも幸福に入れるのかどうか。

それは消費や労働ということとも少し絡まってくると私は思っています、先日、最近若い女性で専業主婦志向が増えているというお話をしたときに、ある年配の女性の研究者に、やはりセレブ主婦にあこがれてみんな幸福に暮らしていますねというふうな話をしたら、それはにせものの幸福ですとかというふうに本当に強力で否定して、自分の能力を発揮して稼ぐことが幸福なのに、それはにせものの幸福です。でも、あなたよりも幸福そうに見えましたなどと絶対に言えないんですけれども、他人が自分のために稼いでくれて、それを自由に使えるというのはやはり幸福かなとも思います。先に幸福の指標も、所得というものは個人の所得ではなかったのか、家庭の所得ではなかったのかというのが多分、少し違って来るかなと思います。それでよく、内閣府の生活満足度調査でも、比較的年金の高い高齢者と、高収入の夫を持つ専業主婦と、パラサイト・シングルが親に養って自分で生活費を負担しない人たちが、生活満足度は高いんです。幸福度は聞いていませんけれども、つまり収入が低い人が生活満足度が高くて、宮本先生と一緒にパラサイト・シングル、親同居未婚者調査をしたときに、収入が少ない親同居未婚者がいかに幸福かというのを嫌というほど何人かの研究者と一緒に実感したところでもありますので、そういうところも少し加味しなくてはいけないのかなと思っています。

もう一つ、白石さんのところで仕事が幸福かというものがありましたけれども、多分、承認が伴う仕事は幸福なんだと思います。私も何だかんだ言いながらいろんなところで呼ばれているということは、ロバート・ライシュも、今は仕事で忙しいというのは自慢にし

か聞こえないという時代になったとありますから、私という個人が求められていることになりす。ですから、ただ単に、いわゆる低賃金で、おまえでなくてもだれでもいいみたいな形での仕事というものは多分、不幸になるのではないかと考えています。

済みません、本当に完全に雑駁な感想でありましたが、今、考えていることを述べさせていただきます。長くなって申し訳ありません。

○山内座長 ありがとうございます。

だんだん時間がなくなってきたんですが、あと、お二人の委員の方にお話を伺いたいと思います。

それでは、広井さん、お願いします。

○広井委員 事務局を含めて、今までの説明を非常にどれも印象深く伺っておりました。

それで、感想めいたものになってしまうんですが、私自身は社会保障分野を中心とする公共政策が専門の人間ですけれども、2つで、1点目としては、お話を伺ってきて、GDPに代わる指標という議論と幸福度の議論というものは、ある程度区別した方がいいのかなというような印象を多少持ちました。幸福の話は、やはり前の話を伺っても、ある意味では本当に、迷路とは言わずとも非常に奥の深い問題で、なかなか指標ということは極めて困難で、チャレンジングな課題であるということ、ある意味で一番面白いテーマであると思うんですが、GDPに代わる指標というところと少し区別して考えて、特にGDPに代わる指標というような辺りができるところをまず明らかにしていくところかなというのが1点。

2点目は、やはり私などの関心から言いますと、最終的に政策にどう結び付け得るかというところが1つポイントになってくるかという点です。勿論、指標づくり自体が固有の価値を持つということはまさにそう思うんですが、社会保障政策でしたり、都市政策、環境政策とか、そこら辺りの関連をどう考えるかということで、単純な言い方をすれば、幸福との関わりが比較的明らかな部分、所得格差みたいなこととか、そういった辺りのところを特に見ていくことが優先順位としては高いのかなということを思いました。

少し感想めいたコメントにすぎませんが、以上です。

○山内座長 ありがとうございます。

それでは、宮本委員、お願いいたします。

○宮本委員 私も、今日はまずは伺おうということで、何も整理したものを持ってきませんが、ちょうど、つい2日前に、私も関わっている団体で「若者ホームレス白書」というものを出しました。ビッグイシュージャパンという団体が発行したものです。この団体は、ホームレスの方の自立支援ということで、1冊300円で街頭で売っているビッグイシューという雑誌を発行している団体が、昨年から若い販売員が非常に増えているということで、その若い販売員、要するにホームレスの方50名に詳細なインタビュー調査をやって、それを基にして、この半年間くらい、まとめをやりまして、私、そのまとめ役をお引き受けしたんですが、それを分析しながら提言をまとめたものです。これは非常に極

端なケースなんですけれども、また幸福というような概念では全く扱っていないんですが、もう一度、幸福感というような用語を使ってまとめ直してみますと、たくさんの方がわかるように思います。

これらの方々は、紛れもなく幸福感の極めて低い状態にあるわけなんですけれども、これらの方々の前歴を見ると、引きこもりとか不登校とか、それから、いわゆる非正規雇用の非常に不安定な雇用状態であることがわかります。先ほども山田先生ほか承認というような言葉を出されましたけれども、これは極めて重要で、承認という意味で言いますと、ゼロ状態に落ち込んでいる人々。それから、もう一つ、関係という言葉もまさにそうで、関係性を完全に喪失した状態というようなことになるかと思うんですが、そこへ至るまでがプロセスですので、いきなりどんと落ちるわけではありません。聞き取り調査で2～3時間聞いていますので、生まれてから現在までの状態がよくわかりますけれども、もともと非常に恵まれない状態であった人が、ある経過の中で、ホームレスという状態に陥りゼロの状態まで落ち込むわけなんです。

そこら辺のプロセスを組み立ててみますと、幸福というものは何かというようなことも出てくるような感じがしますが、幾つの特徴がありまして、例えば自尊心の極めて低い状態。自尊心というものは、引きこもり、不登校、それから無業者にも全部共通して言われるタームですが、自尊心の低さと幸福感が何らかの関わりを持っているんですけれども、その辺りも整理してみるといいかなという感じがします。

それと、これは湯浅さんなども言われていることですが、利用可能な資源で、所得とかというような言葉よりももう少し広げて、先ほど山内先生が言われたような、利用可能な資源というようなことで言いますと、これも利用可能な資源がプロセスの中で減少して行って、最終的に利用可能な資源がゼロになるというようなことであると思います。その辺りに関して持っているデータをもう一度、幸福感というようなところで整理し直してみますと、何が出てくればいいかなというような気がしております。

以上でございます。

○山内座長 ありがとうございます。

委員の皆様からは一当たり御意見をいただいたんですけれども、あと5分ぐらいになりまして、もし、ほかの方でコメントがある方がおられましたら、多分、お一人かお二人ぐらいになってしまうと思うんですが、いかがでしょうか。

峰崎参与、いかがでしょうか。

○峰崎内閣官房参与 立教大学の福島さんは、このスティグリッツ委員会の翻訳を個人でなさっております、もし福島さん何かコメントがあれば。

○福島教授 いえ、特に発言はございません。

○山内座長 いかがでしょうか。せっかくの機会ですから。

○峰崎内閣官房参与 今日は本当に大変興味深い話を聞かせていただいて、これから頑張らなければいけないと思っております。

○山内座長 もし、ほかに特に御発言がなければ、次回に向けてどうするかということなのですが、今日いただいた御説明あるいは委員の皆さんのコメントを踏まえたと、非常に幅が広いですね。ですから、どの辺りに焦点を絞っていくかというのが大変大事なのではないかと思います。

切り口ということだけでも、ミクロで見るか、マクロで見るかというものがありますし、それから、主観的なものを重視するのか、客観的なものを重視するのか。主観的なものですと、やはり 10 段階のスケールであなたは幸せですかと聞くというようなものになるかと思えますけれども、それと、客観的な指標というものがどの程度対応するかというのも論点であると思えます。

それから、水準で見るのか、変化で見るのか。あるいは幸福度のばらつきというものも非常に重要で「最小不幸」というような概念は、その背後にばらつきの話が当然あるわけで、所得分布と同じような意味で幸福度の分布というものが当然あると思えますので、その辺りをどういうふうに考えるか。

それから、満足度なのか、幸福度なのか、幸福感なのかというものもかなり微妙な違いがあると思えます。満足度というものはサティスファクションなんですか。幸福度というものはハピネスであると思えますけれども、新成長戦略でしたか、ウェルビーイングという言葉も使われています。ウェルビーイングというものはハピネスなのか、満足度なのか、どちらに近い概念なのかというところももう少し深掘りして、検討しておく必要があるのではないかと思います。

それから、広井委員からもコメントが出されましたけれども、内閣府でやる研究会ということなので、研究のための研究になってしまっただけではいけませんので、政策にどういうふうに結び付けていくかということが非常に大事なのではないかと思います。

今日は最初の回なので別にとりまとめる必要はないと思ったんですが、次回に向けて少し論点を整理しておいた方がいいかなと思ひまして、発言をさせていただきました。

○和田内閣府大臣政務官 皆様、時間もまいりましたけれども、本当にありがとうございました。

私、本当にトップバッターの内田さんの話からずらっとお聞きしていて、その中でも人生さまざまといいますか、それぞれ多分、御自身でお話しされながら、自分の幸福度をはかると非常にどうしても難しいのかなと思ひながら、でも、すごく幸せなのは、皆様方が積極的にお話くださるということは私から見れば皆さん幸福なんだろうなというふうに、先生がおっしゃっていましたが、求められておりますので、是非、そこは自負心を持って取り組んでいただければと思います。

今、山内座長に大体おまとめいただいたところですが、政治の分野でそういったお話をしっかりしていただきながら、きちっと受け取る準備をしなければいけないと思ひながらお聞きしました。

例えば幸福度といったときにこれだけさまざまな概念が出てきますので、私、自分では

すごく幸せな人間であると本当に心から思っています、人生を生きてきている中で余り不幸であると思ったことがないような性格でございます。かといって、実は本当に自分ですごくいい経験をしていると思っているんですけれども、今、最後に宮本先生がお話しになった、あのホームレスにも私はなったことがございまして、実際にホームレスの生活をしております。新宿の地下道のところで3か月ほど暮らしたこともございます。

そういう仲間と過ごしてみて、私なりに皆様方のお話をお伺いして総括して申し上げますと、こんな感じであると思います。言葉は少し専門家の皆さんに委ねたいと思いますが、人間が幸せかどうかというのは、ベクトルの部分と状態の部分、コンディションの部分があるような気がしまして、コンディションは本当に人生さまざま、働いた環境の中で、何でこんなにひどい目に遭っているんだろうという、こんなひどい状態なんだろうと思うこともあれば、栄耀栄華をきわめて、こんなおれ以上のものはないと思えるような状態もあるわけです。それはそれぞれ、そのときそのときに、さっき山田先生でしたでしょうか、刹那的であるというお話をされたと思いますが、その状態にいるということに対して自分がどう思うかということの中身的に表しているのかな。

けれども、皆さんがさまざまに御説明くださったので言いますと、どんなに栄耀栄華をきわめても、あとは落ちる一方であると思えば、決して幸福感を持つては暮らせない。どんなに底辺をさまよっていても、きっとおれは上がるに違いないと思えば、私なりの言葉で言いますと、ベクトル方向が自分の中で上向きであれば、これは皆、幸せの要素を持っているというふうに思ってお聞きしておりました。ですから、この勉強会ではいろいろな要素を取り入れていただければと思うんですけれども、大きく言えば今のコンディションの部分とベクトルの部分とでどういったことが要素としてあれば、一人ひとりですとさまざまでございますので、我々が責任を持つのは国家として、日本国として、全体としてこういうふうなものがそろえば幸せと言えるのではないのかと言えるようになりたいなと思った次第でございます。

本当にここから先、年が明けてからの議論になりますけれども、皆様方がここに来て思いのたけをお話するのが楽しくてしょうがないというような場にすれば、少なくとも皆様方の幸福度がこの半年間で大いに上がるものであると思いますので、私はその環境をつくるのに誠心誠意取り組んでまいりたいと思います。

どうも、来年もどうぞよろしく申し上げます。ありがとうございました。

○山内座長 それでは、時間になりましたので、最後に事務局の方から次回日程について説明をいただいて散会にしたいと思います。いかがでしょうか。

○田和総括担当参事官 次回は、基本的に先ほどの資料3のところにも2月ごろということなのですが、一応、また多分、国会も開かれておりますので、日程についてはまたメールか何かで、なるべく多くの方が参加できる日を相談させて決めさせていただきたいと思っておりますので、また事務局の方から連絡を差し上げたいと思います。よろしくお願いたします。



○山内座長 それでは、次回以降もハッピーな研究会にしたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

ありがとうございました。